

天文館史跡めぐりマップ

南九州随一の賑わいを見せるまち、「天文館」

普段、私たちが何気なく呼んでいる「天文館」という地名。

実は、どこからどこまでを「天文館」というのか明確な区分は無く、また、世代によても、天文館と呼ばれる範囲は様々なようです。

「天文館」は、かつては、島津七十七万石の城下町として栄え、大身たちの屋敷のほか、地名の由来ともなっている天文観測施設の「明時館」や、米・醤油などの管理を行う藩の役所などがありました。

現在は、食事やショッピングなど、多くの人々で賑わう南九州随一の繁華街ですが、まちの中を覗いてみると、藩政時代からの史跡や、当時の様子をうかがわせる通りの銘碑などが数多く残っています。

このようなことから、当局では、「天文館」における交流人口の増加と商店街の活性化を図ることを目的として、繁華街「天文館」に残る史跡などを紹介したマップを作成致しました。

このマップを手に「天文館」のまちを歩いていただき、歴史のあるまち「天文館」を、少しでも感じていただけた幸いです。

| | |
|--|---|
| | 三官橋通（さんかんぱしどおい） 中国から逃れてきた医者「沈一貫」は、島津家に仕えた。一貫は、名医として有名になり、住んでいた近くの清滝川に架かる橋に「一貫橋、二貫橋、三貫橋」の名前がつけられ、やがて「貫」が「官」になり、通りの名前になったという。 |
|--|---|

| | |
|--|--|
| | 黒田清輝（くろだせいき）生誕の地 1866年生まれ。18才の時、父の薦めで法律を学ぶためにパリに留学したが、まもなく本場の洋画に魅せられ、ラファエル・コランに師事。婦人をモデルにした「湖畔」など多くの名作を残した。帝国美術院院長や貴族院議員も歴任している。 |
|--|--|

| | |
|--|--|
| | 東郷家拝領屋敷跡（とうごうけはいりょうやしきあと） 薩摩藩独特の兵法である示現流を鹿児島に伝えた東郷家が、島津家から拝領した屋敷があった。示現流は、東郷重位が京都で修行したあと薩摩に伝えたもので、第18代家久の面前で初めて披露した重位は、剣法の指南役を任せられた。 |
|--|--|

| | |
|--|--|
| | 示現流兵法所資料館 示現流について、東郷家古文書を中心に一般公開が行われている。 開館時間：午前10時～午後5時。 入館料：大人500円、小・中・高300円。 休館日：毎週月曜日 |
|--|--|

| | |
|--|--|
| | 伊勢殿屋敷跡（いせどんのやしき） かつて、この辺りに伊勢殿の下屋敷があった。上屋敷はこれより東側の一帯にあり、敷地面積は約3,500坪あった。一所持ち格の伊勢家の、参勤交代での「諸侯妻子の在府制」の建言等の功績が認められ、城下の中心地に屋敷が与えられたという。 |
|--|--|

| | |
|--|--|
| | ザビエル滞鹿記念碑 1549年、鹿児島市の稻荷川河口に上陸し、日本に初めてキリスト教を伝える。1911年、ザビエル渡来を記念して、県内初の石造りの教会が建てられたが戦災で焼失。焼け残った旧教会の石壁を利用して記念碑が建てられた。 |
|--|--|

| | |
|--|---|
| | 諫訪小路（すわんしゅうじゆ） 現在、この通りを鹿児島中央駅方向へ向かった所に清滝公園があるが、当時、この公園付近に諫訪神社があったことから、このように呼ばれるようになったという。 |
|--|---|

| | |
|--|--|
| | 千石天神 島津藩政時代からこの通りにあって、天神馬場通りの由来ともなっている神社。菅原道真を祭るこの神社は、通りの守り神として、また、学業の神様として広く市民の崇敬を受けている。 |
| | 地神様（じがんさま） 江戸時代に奉られ、以来「グルメ通り」を見守り続けている地神様。「じがんさま」を境に火災の延焼を免れたことから、いつしか、災いを止める円満の神として、人生の無事や愛の成就を祈るようになったとのこと。 |
| | 天文館の碑 1779年、第25代島津重豪は、ここに天文・暦学研究、暦編纂を行うための施設である「明時館」を建てた。藩内の暦はすべてここから配付された。明時館は別名「天文館」とも呼ばれ、現在の繁華街天文館の名は、これに由来している。 |
| | 納屋馬場（なやんばあ） 現在の「なや通り」を古くは納屋馬場と言い、江戸時代、藩指定の魚市場として納屋組（魚商組合48人）に市場を開くことが許され、大変賑わったようである。通り名は、この納屋組にちなんでつけられたという。 |
| | 野菜町通（やせまつど） 現在の「中町ベルグ」の通りを、古くは野菜町通りと言い、吉野や伊敷、郡元などから集まる野菜が山のように積まれ、野菜の露天が多数立ち並ぶ、とても賑やかな通りだったという。 |
| | 石燈籠 「いづろ通り」はこの石燈籠に由来していると言われている。この燈籠は、屋久島へ通う船の航路標識として屋久島岸岐（がんぎ（堤防））にあったものを移したという説と南林寺（松原神社）の参道に並んでいたものの一つという説がある。 |
| | 月照上人遺跡の碑 この場所に、京都清水寺の僧月照が宿泊した旅館「俵屋」があった。幕府の追及を逃れ、一足先に帰鹿していた西郷隆盛を頼ってきた月照が、錦江湾に身を投じるまで過ごした場所である。 |
| | 鹿児島銀行本店別館 大正7年竣工。鉄筋コンクリート造2階一部3階。花崗岩貼りの外壁でルネッサンス様式を基調としている。本土の歴史的景観に寄与しているとして平成19年10月2日に登録有形文化財に指定。鹿児島市内現存最古の鉄筋コンクリート造建築物である。 |
| | 丹下梅子生誕の地 世界的女流化学者。ミルクで育つ乳児に出来やすい吹き出物を防ぐ栄養素が、ビタミンFであることを研究実験で確認。また、自らの全財産を化学研究の発展に役立てようと丹下奨励金を創設。銅像が山形屋1号館正面入口前に建てられている。 |
| | 南日本銀行本店 昭和12年、鹿児島無尽側鹿児島支店（金融機関）として建設。鉄筋コンクリート造6階。設計は元鹿児島県技師の三上昇氏。造形の規範になっているとして、平成10年12月11日に登録有形文化財に指定されている。 |
| | 木屋町通（きやんまつどおい） 山形屋1号館裏から朝日通りまでの通りを言う。かつて、この辺りに材木屋が多かったことからこの名前がついたといふ。 |
| | 俊寛の碑 俊寛は、鹿ヶ谷の陰謀が露見し、鬼界ヶ島（三島村硫黄島）に流刑され、その地で生涯を終えたと言われている平安時代の僧。俊寛はこの堀から硫黄島へ向け船出したと言われている。明治30年頃まではここに堀（俊寛堀と呼ばれている）があった。 |
| | 医学院跡 1774年、第25代島津重豪が創設した医師養成と薬草研究を目的とした施設。希望する城下士、地方に住む郷士や足軽、町人も聽講を許可され、7人前後の講師のもとで数十人から百人ほどの医学生がここで学んだ。 |
| | 造士館・演武館跡 1773年、第25代島津重豪が創設した教育施設。造士館では、8才～22才までの城下士子弟数百人が朱子学を中心に多様な学科を学んだ。演武館は、剣術、槍術、馬術など藩中武芸の中心道場であった。西郷隆盛、大久保利通らもここで学んでいた。 |
| | （県）里程元標（りついげんぴょう） 江戸時代、鹿児島城下から藩内各地へ通じる道には1里毎に距離を示す目印が立てられたと言われている。その起点は、市役所別館付近の広口と呼ばれた広場にあったが、今は残っていない。明治時代の元標がここに残っている。（明治35年建立） |
| | 小松蒂刀銅像 1835年、喜入領主肝付兼善の三男として生まれる。のちに吉利領主であった小松家の養子となり小松蒂刀と改名。薩摩藩家老として薩長同盟や王政復古、明治維新に尽力。維新後は参与として版籍奉還を画策するも36才の若さで亡くなった。 |
| | 鹿児島市中央公民館 昭和2年竣工。鉄筋コンクリート造地上3階地下1階。設計者は片岡安氏。玄関付近の柱と壁には、地場産材の加治木石を使用している。造形の規範になっているとして、平成17年11月10日に登録有形文化財に指定されている。 |
| | 西郷銅像 西郷南洲翁50年祭記念事業の一つとして、昭和12年5月23日に除幕完成したものである。製作者は、郷土出身の彫刻家安藤照氏。像の高さ：5.76メートル。路面からの高さ：14.2メートル。総工費：約11万円。これらを刻んだ石碑が、市立美術館との境にある。 |
| | 館の馬場（やかたんばあ） 鶴丸城（御館とも言われていた。）前の通りを言う。昭和60年に廃止された市電の上町線は当初、ここを通っていた。現在はイヌマキ並木の街路樹にガス灯、歩道脇を鰐が泳ぐ道に整備され、「歴史と文化の道」として市民に親しまれている。 |
| | （市）里程元標（りついげんぴょう） 石碑の正面に「距鹿児島縣廳貳丁貳拾九間」（鹿児島県庁まで約270メートル）と記されている。この他、西（伊敷村）、南（中郡宇村）及び北（吉野村）までの距離なども記されている。（明治40年建立） |
| | 持明院様（じめさま） 第18代島津家久夫人。器量には恵まれなかつたと伝えられることから、心優しく幸せな家庭を築いた夫人の人柄を慕い、毎年10月5日の命日に、この像におしろいや口紅をぬって、夫人にあやかるようにお参りするならわしが残っている。 |
| | 旧薩摩砲台火薬庫跡 第28代島津斉彬は、洋式砲台への改造を含め、沿岸防備のための砲台を、大門口、祇園之洲、弁天波止場、袴腰、沖小島などに築いた。これらの砲台で使用される火薬庫がここにあったと思われる。 |
| | 鹿児島県立博物館（旧鹿児島県立図書館） 昭和2年、県立図書館として建築。鉄筋コンクリート造3階。設計は鹿児島県建築課の岩下松雄氏が担当。当時としては、九州随一の規模を誇る図書館だったようである。平成20年4月18日に登録有形文化財に指定されている。 |
| | 南泉院馬場（なんしんばあ） 照国神社から照国町交差点までの通りを言う。江戸時代、照国神社のところに、南泉院という天台宗の寺院があったことから、このように呼ばれるようになった。 |
| | 桜島爆発記念碑 大正3年1月12日の大爆発を記念してこの碑が建てられた。大正5年に建てられたこの記念碑は、当初、国道3号と10号が交差する道（南泉院馬場）の中心にあったが、道路改良に伴い現在の場所に移設されている。 |
| | 鹿児島県立博物館考古資料館 明治16年、県立興業館として建築。市役所の仮庁舎として3年間使用されたこともある。鹿児島市内にある石造りの建築としては、鹿児島市磯の尚古集成館に次いで古い建物。平成10年12月11日に登録有形文化財に指定されている。 |
| | 照国神社の大鳥居 照国神社の御祭神は、第28代島津斉彬（照国大明神）である。この神号は、生前の幾多の功績が称えられたもので、孝明天皇より授けられた。大鳥居は、昭和4年に昭和天皇の御即位を記念して建てられた。 |
| | 島津忠義像 島津家第29代当主。父久光の補佐を受けながら藩政改革に努める。日本最初の本格的な紡績工場をつくるなど、集成館事業の継承にも努めた。明治維新後には長州藩、土佐藩などとともに進んで版籍奉還を行い、知事、貴族院議員を務めた。 |
| | 電信使用の地（探勝園内） 1857年、島津斉彬は鶴丸城本丸から探勝園までの間に、日本で初めての電信通信を始めた。線の長さは、500～600メートルあった。探勝園は、現在、公園になっているが、当時は、鶴丸城二の丸の庭園であった。 |
| | 石塚月亭君文化顕彰碑 明治16年、鹿児島県国分市（現霧島市）生まれ。大正期の少年雑誌界を席巻した大衆雑誌「日本少年」を刊行し、近代日本文化の一翼を担った。のちに、雑誌「三州」も創刊。郷土文化の向上にも尽力した文士である。 |
| | 露国皇太子ニコラス殿下来対紀念碑 ロシアのニコラス皇太子（のちのロシア帝国最後の皇帝ニコライ2世）が、1891年に鹿児島に立ち寄った際の記念碑。シベリア鉄道の起工式に参列する途中に寄港。石碑には、市民が国旗を掲げ緑門を立てて歓迎した様子が刻まれている。 |
| | 島津久光像 島津斉彬の異母弟にあたる。忠義の代に「國父」として藩政の実権を握り、忠義を後見した。明治以降は内閣顧問、左大臣を務めるが、政府首脳との対立もあり辞任して帰鹿。晩年は歴史書編纂に努め、70才で死去。国葬が行われた。 |
| | 幼年學校址 西郷隆盛などがつくった士官養成のための学校で、私学校のひとつ。西郷隆盛、桐野利秋、大山綱良ら明治維新の功績に対する賞典禄10万石をもとにつくられた。 |
| | 島津斉彬像 1809年、第27代島津斉興の長男として江戸で誕生。藩主就任（43才）直後から集成館事業を展開。幕府との関係を一層密にするため、養女篠姫を13代将軍徳川家定に嫁がせた。下級武士を積極的に登用、近代日本の礎を築いた。 |

監修

特定非営利活動法人
まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会

発行

〒892-8520 鹿児島市小川町3番56号
鹿児島地域振興局総務企画部総務企画課
TEL099-223-0161（代表）